

審査の結果の要旨

論文題目 恐慌と信用

氏名 よしむらのぶゆき
吉村信之

1 概要

本論文は、為替取引・決済機能を軸にマルクス経済学の貨幣信用論ならびに恐慌論を再構成することで、資本主義の歴史的発展やその現状に対して、新たな分析視角を提示することを課題としている。本論は、次の目次のごとく、4章からなる理論編と、同じく4章からなる歴史現実編の二部で構成されている。

序論—本稿の概要—

I. 貨幣信用論と恐慌論（理論編）

第1章 物神性と原理論の方法—いわゆる「利子生み資本」に関連して—

第2章 信用論の再考—貨幣取扱業務と恐慌をめぐって—

第3章 為替と恐慌

第4章 信用論・信用恐慌論の研究潮流

II. 貨幣信用の歴史的展開（歴史現実編）

第5章 19世紀イギリス金融史断章—イギリスの発券集中によせて—

第6章 世界貨幣と国際通貨—「ドル本位」制の歴史的位相—

第7章 現代における恐慌と信用

終章 総括と展望

第1章は近年の『資本論』形成史研究の進展をふまえて、マルクス経済学の貨幣信用論の基礎を見なおした論考である。巷間に新 MEGA とよばれる完全版の『マルクス=エンゲルス全集』の一卷として、第II部門第4巻第2分冊が1993年に刊行され、これによって、現行『資本論』第3巻（エンゲルスの編集になる第4版）のもととなったマルクスの自筆草稿が一般の研究者にも直接利用可能となり、マルクス自身が現行第3巻の第5篇（草稿では第3部第5章）「利子生み資本」で何を解き明かそうとしていたのか、あらためて明らかにされるようになった。この問題に関しては、すでに1980年代から大谷禎之介氏が草稿のフォトコピーに基づく綿密精緻な草稿の解説を進め、エンゲルスによる編集にしたがったのでは、マルクスの意図を読み損なうおそれがあると指摘してきたのだが、現行『資本論』ベースで進められてきた宇野弘蔵氏の流れをくむ原理論研究（以下宇野理論という）では、このような形成史研究の成果に着目した論考はほとんどなかった。このような反省にたつて、本章では、1857-58年の草稿（『経済学批判要綱』）から、61-63年の草稿（いわゆる「23冊ノート」）を経て、63-65年の草稿（現行版第3巻の「主要原稿」を含む）に

至る、マルクスの「経済学批判」体系のプランの変遷を追跡し、原理論における信用論で解き明かされるべき課題が何であるかが再考されている。こうした文献考証を通じ、一方で、『資本論』の執筆過程で、宇野理論が依拠してきた個別資本の競争によって形成される信用機構論を重視する考え方が、マルクスにおいても傾向として強まっていたことが確認されるとともに、他方で、「主要草稿」第5章のⅢのなかで、その一部として現行版第35章「貴金属と為替相場」が一続きに書かれた部分であるということを、宇野理論が無視してきたことの弊害は大きいと述べ、この章で問題にされているような為替決済論は、原理論研究の枠外におかれるべき歴史的事例ではないと論じている。

第2章は、為替取引・決済機能を、商業資本の一種である貨幣取扱資本の機能として捉え、これを今日の宇野理論のなかで優勢な位置を占める、信用創造的な信用機構論に對置し、両者の関連を問う内容になっている。宇野理論においては、個別資本間の与信・受信の根拠を掘りさげること、将来の販売によって取得される貨幣が、現在の購買力として先取りされるという関係に注目し、これを基礎に銀行による独自の信用創造機能を説く信用機構論が有力視される傾向にあった。これに対して、本章では、為替決済における振替の原理に注目することで、その発展のうちに銀行の債務（銀行に対する債権）が決済手段として用いられる点に銀行信用の本質があるとされ、この銀行業務が現行『資本論』では第4篇で商業資本の亜種として論じられている貨幣取扱資本に通じ、商業資本のもとで多数債権債務の相殺関係とも深く関わるということが明らかにされている。このように信用論研究の方向を転換することによって、従来の返済還流の遅延を信用恐慌の主因とみる、抽象的一般的な恐慌論をこえて、その勃発過程の分析に進んでゆくことができるとされている。

第3章では、第2章の信用論を基礎に、独自の信用恐慌論が展開されている。従来の恐慌論が、好況末期における産業資本の資金形成の鈍化によって銀行資産の劣化を説明し、銀行に対する信用不安から恐慌の可能性を一般的に論じることとどまっていた点を批判し、本来の急性恐慌を説明するには、たとえば隔地間送金にみられる、為替手形の需給に左右される流通費用の変化と、現金決済に伴う金現送費との比較考量から誘発される急激な金流出と利子率急騰に代表されるような、銀行の決済機能に着目することではじめて、激発恐慌の勃発は理論的に説明可能になるという。国内的には中央銀行に対する信用不安が発生せず、中央銀行券が支障なく流通している状況下でも、対外決済の側面から恐慌現象は勃発する。これまでの信用論では、決済にともなう空間性を軽視し、もっぱら将来の支払という時間的契機に一面化したため、激発性をともなう恐慌現象が理論的に捉えられなかったというのである。そしてさらに、このような宇野理論の限界は、対外関係を捨象した純粹資本主義論のみならず、資本主義の空間性に焦点を当てた世界資本主義論においても、対外関係は中心部の価格関係を翻訳されて処理されるとする「内面化」の理論に禍され、充分解明されてこなかったとして、経済原論の方法論的見直しの必要性を指摘している。

第4章は、先行研究を整理・展望し、第1章から第3章までの理論編全体の意義を総括する内容になっている。ここでは戦後における信用論研究のなかで、貨幣資本家と機能資本家を区別する『資本論』の「利子生み資本」論を批判し、産業資本・商業資本相互の資金融通の発展として商業信用・銀行信用を展開する宇野弘蔵氏らの研究の意義を高く評価し、さらにその後、宇野理論の流れのなかで、1980年代以降、山口重克氏らによる独自の「信用創造」論的アプローチが支配的となったことが明らかにされ、これに対して、本論文における「為替決済」論的アプローチにつながる諸研究が徐々に現れつつあることが紹介されている。また、この1980年代以降の展開のなかで、景気循環に対する信用論の影響が一般化・抽象化され、恐慌の勃発過程に対する関心が後退していったことに対して、この勃発契機分析に「為替決済」論的アプローチが有効性を発揮する点が主張されている。さらに、1980年代以降、国際通貨・現代通貨分析の新展開、発展段階論・恐慌史研究の活性化、ポスト・ケインズ派の金融不安定性論の影響、など20世紀末の現実を念頭においた研究の多様化が進んでいることにふれ、そのなかで吉田暁氏の「内生的貨幣生成説」によるペイメント・システムの理論を高く評価しながらも、本論文の為替決済論との異同が論じられている。

第2部の「歴史現実編」に移って、第5章では、19世紀イギリスにおける発券集中の歴史を主たる対象として、国内金流通が、景気循環と物価動向に対して果たす役割が解明されている。イングランド銀行への発券集中自体は、地方銀行による銀行券の濫発が、恐慌を通じて社会的災禍を引きおこすことへの反省から導入された、制度的措置であったが、これに伴って、5ポンド未満の少額銀行券の発券が制限され、その結果、貸金支払いや最終消費財の売買といった領域に、幅広く金貨流通が存続し続けることになった。このため好況期の貸金騰貴は貸金支払いのための金貨流通の増大を招き、中央銀行の金準備を圧縮しながら、なお物価水準のほうは安定的に推移する19世紀的現象が生じたのだという。こうして、国内金貨流通は中央銀行の金準備の流出入によって相対的に安定的に調整されたのと対照的に、対外的な為替による決済のほうは、好況末期に金現送によって急迫的恐慌を引きおこす原因となった関係が明らかにされている。

第6章では、金兌換が停止された「ドル本位制」の歴史を背景に、第1章や第2章で考察した原理的な銀行による貨幣取扱業務（為替による決済と金現送による決済）がどのように変質していったのかが論じられている。はじめに、ポンドが貿易媒介通貨から国際通貨になってゆく過程について紹介し、これに比べて、ドルが国際通貨になってゆく過程では、IMF協定に示されるような制度的な力が強くはたらいた点が明らかにされ、この制度的要因は、1960年代のドル本位制の動揺を経て、変動相場制に移行したのちにもなおドルが国際通貨の地位を維持するのに一貫して役立った。こうした制度的枠組のなかで、膨大なドル資産が累積したことが、合衆国に大規模な金融市場の発達をもたらし、貿易媒介通貨とは区別される為替媒介通貨としての性格をドルに付与したというのである。本章ではこの歴史的事象

が、上層での対外決済と、下層の一般流通における金貨流通の間に挟まれた中間に位置する商業流通に起源をもつ信用貨幣が次第に膨張をとげ、銀行を媒介とした資本家間の決済機能が上層と下層に向かって浸透する過程として理論的に捉え返されている。そして、こうした特殊歴史的な条件のもとで維持されている現代の決済システムには、近年のサブプライム金融危機にみられるような破綻の可能性が内包されていることが示されている。

第7章は、資本主義の歴史を現代まで見通したうえで、その変質を解明するための理論的方法を模索する内容になっている。ここでは、こうした資本主義の超長期の歴史の変質を捉える方法として、岩田弘氏による「世界資本主義論」を高く評価する一方で、それがなお、20世紀末のグローバリズムの動向や、とりわけその下で生じたドル本位制下での国際通貨・ドルの持続という事態を射程に収めきれなかった限界が明らかにされる。とりわけ今日の先進資本主義国に関しては、金の制約を離れ、金融市場の資産が肥大化するだけでなく、金融機関が消費者の資産管理や住宅ローンなどさまざまな形態で、その活動の場を、生産を担う資本間の決済機能から、労働者の消費過程に移すという、伊藤誠氏のいわゆる「労働力の金融化」の現象に注目する必要があるとされている。

終章では、本論文の意義が総括されている。①マルクス自身の「主要草稿」をふまえ、エンゲルス編になる『資本論』第3巻第5篇「利子生み資本」を検討し、後者に規定された宇野理論における貨幣信用論研究の課題を見なおしたこと、②信用創造論に純化する傾向にあった宇野理論の信用論を再検討し、貨幣取扱機能という決済論の側面を統合した内容に拡充したこと、③銀行の信用不安一般によって、抽象的に説明されてきた恐慌論を見なおし、為替による決済機構論を組み込み拡充することで、信用恐慌の勃発過程に対する理論的解明の可能性を探ったこと、④19世紀のイギリスの歴史を背景に、対外貿易と労働者による生活物資の両領域における金貨流通の存在と、この中間に位置する資本間取引での信用貨幣の発達という三層構造の貨幣信用論を構築し、信用恐慌の勃発過程を理論的に考察する方法を明らかにしたこと、⑤兌換停止後の「ドル本位制」から「変動相場制」に至る歴史をふまえ、現代における決済機能の変容とその限界を明らかにしたこと、などが主たる結論となる。

2 評価

本論文の積極的意義を述べれば、次のようになる。

第1の意義は、マルクス経済学の貨幣・信用論のなかで、決済機能が果たす役割を重視する研究の意義を明確にした点にある。1970・80年代以降、宇野弘蔵の流れを引き継ぐ一連の原理論研究のなかでは、信用の基本を、将来の貨幣支払の、現在の購買力として先取りとみるアプローチが支配的になっていった。本論文は、この異なる時点間の時間的關係に焦点をあ

てた、独自の信用創造論的信用機構論に対して、異なる地点間の空間的關係に焦点をあてた、為替取引とその決済システムを基本とする貨幣信用論を再構成する試みが提示されている。このように、研究の基本方向の転換が鮮明にされている点はひとまず評価できる。

第2の意義は、このような貨幣信用論の再構成の必要性を明らかにするため、最近の『資本論』形成史研究に踏みこみ、マルクス経済学の従来の信用論研究が共通基盤としてきた現行『資本論』第3巻第5篇「利子生み資本」を新たな視点から読みなおし、そこから宇野理論のパラダイム転換をはかった点にある。宇野理論においてはこれまで、この第5篇を前半と後半に分け、前半の4章を固有の意味での「利子生み資本」論（「それ自身に利子を生むものとしての資本」）として後にまわし、後半の信用制度論を個別資本による競争論的な観点から再構成する展開方法が定着していた。本論文は、宇野理論の一部で注目されてきた第4篇における「貨幣取扱資本」を、決済機能論の観点から独自に理論化し、現行版の第5篇の末尾に近いところにおかれた第35章「貴金属と為替相場」の理論的性格を読み解くことで、銀行の貨幣取扱業務と広義の為替決済を基軸にした独自の貨幣信用論を構想した点で、一定の評価を与えることができる。

第3の意義は、為替決済論を組み込むことにより、信用恐慌の勃発過程に対する理論的説明を深化させた点にある。信用創造的信用機構論に進んでいった宇野理論の主流は、好況末期における貸金率上昇による利潤率の低落が、全般に銀行債権の支払を遅延させる関係の解明に注力し、信用恐慌に関しては、銀行資産への不信という一般的・抽象的な契機でその可能性を示唆するに止めることが多かった。本論文は、草稿研究に基づき現行『資本論』で第5篇第35章「貴金属と為替相場」とされている部分の理論的性格を明らかにし、この部分を独自に理論化することで、為替決済の限界から金現送に急激に切り替わる関係を明確にした。こうしたかたちで、空間的な契機を軸に激発恐慌の勃発過程に接近する途を拓いた点も、本論文の一つの成果である。

第4の意義は、以上のような信用論と恐慌論に関する理論的考察の成果を、資本主義の超長期の歴史的事象と関連づけた点にある。宇野理論の主流では、原理的な考察は基本的に19世紀イギリスの現実に近似したものと考えられ、逆にそれ以降の資本主義の歴史的現実、理論的展開から乖離するものとされてきた。本論文では、こうした純粋資本主義論の理論と現実の峻別説に対抗し、いわゆる世界資本主義論的アプローチを参照しながら、今日にまで及ぶ資本主義の歴史的変質を解き明かすマルクス経済学の新たな方法論が模索されている。とくに、世界資本主義論的アプローチでもなお、貨幣信用論レベルにおいて為替決済の空間性を十分に理論化できなかった点を批判し、金属流通を抱えた19世紀の現実にも、信用貨幣が一般化した20世紀の現実にも適用しうる貨幣信用論を構築しようと試みた点は、その成否は別として評価することができる。

しかし、本論文には、疑問とすべき論点や、さらに解明すべき未解決の問題も残されている。

第1の問題は、本論文の論証方法あるいは記述様式にある。『資本論』形成史にせよ、宇野理論の研究史にせよ、いずれも詳細丹念に進められている。これは、ある意味で本論文のメリットといってもよいが、反面、基本となる概念規定が、文献資料的考証の影に埋もれ、明確なカタチで取りだしにくいというデメリットを伴っている。『資本論』形成史や、宇野理論を中心とした学説史の整理に、見るべきもの無しとはしないが、総じてコアとなる理論を明確に定式化し、独自に論証する側面がなお不十分である。

第2の問題は、従来の信用創造的信用機構論と、本論文でその意義が強調されている決済論的信用制度論の位置関係が必ずしも明確ではない点である。信用創造的信用機構論に、たとえば、貸付返済が銀行券流通の第一基盤として強調される反面、銀行の自己資本の役割が必ずしも明確にされていない、といった限界がいくつかあるのはたしかだが、本論文の信用論は、こうした限界を補強するカタチで、けっきょく前者に統合されるものなのか、あるいは既存の信用創造的信用機構論にとってかわり、信用論の基軸を為替・決済業務に転換することを主張するものなのか、なお十分に論じられているとはいえない。統合か転換か、単純に割り切るのは困難かもしれないが、基本的な方向性はもっと明確にする必要がある。

第3の問題は、理論の現実への適用に関わる。第5章で多くの紙数を割いて論じられているのは、19世紀イギリスにおける発券集中の過程が、同時に、銀行券流通を産業資本間の商業流通に限定し、国内の一般流通では金貨流通を維持させたという歴史的事実である。しかし、この国内金貨流通の存続という「事実」がいかなる意味で、理論編の第2章と第3章で強調された、為替決済を中心とした信用論、あるいは、対外金流出を重視した信用恐慌の勃発論という「理論」とどう結びつくのかは、なお定かではない。第5章の主題は国内金流通であり、事実上対外決済における金の役割を重視した第2章、第3章の為替決済論や信用恐慌論の例解にはなっていない。この理論篇の二章は事実上、19世紀の金本位制の現実に強く依拠した内容になっており、これと同じ19世紀の現実を論じた歴史現実編冒頭の第5章の関係は、理論とその例解という対応ではなく、国内と対外という対応になってしまっている。

第4の問題は、同じく理論の現実への適用に関わる。第6章では主として、今日の「ドル本位制」に至る歴史過程を鳥瞰し、国家的介入などの外的条件により、金決済が対外的にも対内的にもその役割を縮小・消滅させてきたことが指摘されている。しかし、この「事実」が理論編の第2章、第3章における原理論レベルの為替決済型信用論の「理論」と、どう関連するのか、この点もやはり判然としない。今日の国際通貨ドルを為替媒介通貨論で説明し、金決済の欠落という弱みが、ドル建資産の累積となって国際通貨としての強さになった「歴史的な捻れ」を事実として指摘しても、第2章で提示されたような、19世紀の金本位制に事実上依拠

した原理論に対して、どのような含意をもつのかを示されていない。理論的には19世紀の金本位制が原理的な信用論で説明可能な現実であり、第6章のドル本位制、変動相場制は国家的介入や制度的補強によってはじめて維持されているというのでは、本論文が批判してきた純粹資本主義論の枠組から脱却したことにはならない。この点でも、理論篇と歴史現実編との間には、根本的な問題が残されている。

第5の問題は、本論文の基礎となる方法論に関わる。本論文が、原理論の直接的な適用対象を19世紀のイギリスに限定する傾向にあった宇野理論に対して、現代に至るまでの歴史的事実にその適用対象を拡大しようとしたことは、それ自身として評価されてよい。しかし、それには、一般的な理論を歴史的に変化する現実に適用する方法論的整理が前提となる。第7章では、そのはじめの部分で、宇野弘蔵の方法論を批判した岩田弘の世界資本主義的アプローチに注意を促しているが、これに続く部分では、直近のサブプライム金融危機の現実に論点が逸れ、原理論を歴史的現実のいかに適用すべきかという基本問題に答えることなく終わっている。方法論ですべての問題が片づくわけではないが、新たな信用論を構築し、今日に至る資本主義の全歴史的現実接近しようとするのであれば、方法論的反省は欠かせない。

今後の課題とし解答をまちたい。

以上のような問題は残されているが、本論文は博士（経済学）の学位を授与するに足る研究成果であるという結論に審査委員会は一同一致した。

2017年1月13日

審査委員：柴田徳太郎（主査）

岩田佳久

小幡道昭

野原慎司

矢坂雅充